Title	リカアドオ地代学説の先蹤 (下)
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.10 (1923. 12) ,p.1790(180)- 1813(203)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231214-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(a. a. O. S. 80-82) けれども、それは如何なる事情に基いてあるかと云ふ問題に對するヘンシユタインの見解は別の機會に譲るゝとする。

(十二、十一、十四)

リカアドオ地代學說の

先蹤 (下)

津 田 誠 一

九

姑らく Seligman の品騰に従へば、トツレンスも亦た穀物條令を環る經濟論評の代表的なる闘士の一にして、且つ其純理經濟學の諸問題に寄與せる貢獻の當然至大の評價を博す可くして、然も往々斯界の認識を逸せる不遇なる論客のひとりしものである。其 "An Essay on the Ex-

gman: On some neglected British Economists,

Economic Journal, London, 1903) 而して自ら誇

負する侃諤の論議の案外輕々に看過せられたる憂憤は、トツレンスの胸奥深く鬱積せる所と覺しく、リカアドオが其「經濟學原論」の初版に於

て重要な數項に關する彼れの先蹤に寸毫の言及する所無きを知るや、乃ち焦慮措く能はず直接書を寄せて這般の懈怠を難詰すると共に、更

に前掲自著第三版(一八二六年)の序言に於ては、「一八一四年の脱稿に懸り翌年初頭に公刊したる本書の第一版に於て、著者は其マルサス及び

リカアドオの甚だ適正なる且つ獨創的なる研究を知悉する以前に、既に最劣等級の耕作地と優良耕作地との間に於ける放資收益の較差が地代の形態を以て現前する事、並に吾人が生計資料

を産出す可き費用を増大する時は、勞働生産物の一層多大の部分が勞銀として所要せられ、一

ternal Corn Trade; containing an inquiry into the general principles of that important branch of traffic; an examination of the exceptions to which these principles are liable; and a comparative statement of the effects which restrictions on importation and free intercourse are calculated to produce upon subsistence, agriculture, commerce, and revenue," 1815 は表題の甚だ冗長なるに拘らず、之を仔細に點檢する時は次の如き功績の顯著なるを認めねばならぬ。即ち第一に彼れはマルサス及びリカアドオに依頼せずして、地代の法則を發見した。第二に彼れはリカアドオに依り採用せられたる勞銀學說の發達を促した第三に彼れは通常リカアドオの創意に歸せらるる Comparative cost の法則を發見した。第四に、彼れはリカアドオの所論に離反し、且つ一層真理に近接せる利潤學說の進展に資した。Sel-

igman 層僅少の部分が利潤として殘存する所以を確證

せり」として、胸底不滿の一端を公然披瀝した

(3rd ed. Preface, vii)。然らば將たして Seligman

の評言は適確に正鵠を穿てる乎。トツレンスの

自負に確固たる根柢の存する乎。

諸他の學說は姑らく問はず、今地代學說の關

與する限りに於てトツレンスとリカアドオと兩

家の異同を檢討するに、先づ彼等は穀物貿易の

制限が收穫遞減作用の實現を促進し、地主の所得を偏頗に昂騰せしむる禍患を憂ふる點に於て

其軌を一にする。即ちトツレンスは謂へらく、

「穀物輸入に關する凡ゆる制限は素質の低劣な

る土地の耕作を強要し、斯くして土壤の上に轉

向せられたる勞働並に資本の特定部分より其最

も有益なる用途を奪ふのみならず、更に穀物の

自然價格を増進するに依り普ねく勞働並に資本

の生産力を低下し、該國土の繁榮に對して一般

的なる障礙を興ふるものである(Torrens: op. cit. 1st ed. pp. 73-74)。斯くて「穀價の騰貴に伴ひ、従前耕耘の失費を報償する能はざりし劣等地は今や其耕作の資本に對して普通の利潤を齎らすに至る可く、隨つて優良地は、市價騰貴以前の本元の貸借關係に於ては普通以上の利潤を齎らすであらう。それ故に斯かる優良地が其貸借を更新する時に於ては、資本家の競争は必然地主の地代を上進し、遂には其雇傭せる勞働並に、資本に關する普通の勞銀並に利潤以上には、耕作者に餘す所毫釐も無きに至るであらう。競争は永切に資本利潤率の平均を促す。而して劣等地の耕作を可能ならしむる物皆は、必然相應の地代を優良地に騰貴せしめる。固より現存の貸借期間中は、土地に追加せられたる増大價值は借地人に歸屬す可しと雖、田圃の貸借を更改するに當つては、そは地主の収入を増加するに至

るであらう」(pp. 219-220)。故に畢竟穀物輸入の制限は、土地を所有せる貴族に年金を給する爲、麴麩に課税を爲すと同斷である。そは怠惰富裕なる者を賑はさんが爲に、貧困勤勉なる者の懷中より金圓を掠奪するものなれば、國法公認の偷盜を行ふと何等の擇ぶ所無し」と云ふのである(p. 317)。

如上の言辭をのみ瞥見する時は、或は一應トツレンスの自讃の必ずしも失當ならざる所以を首肯せしむるに足るものがあらう。蓋し劣等地耕作の必要が一般地代の騰貴を促すと云ふ考察は、爰に喋々するまでも無く、リカアドオ流地代學說の核心たるが故である。乍併更に一步を進めてトツレンスが地代の發生騰貴の作用に關し、リカアドオの如く唯一原因にのみ終始せりや將た又マルサスの如く複數原因を顧念せりや更に地代と價格の因果關係に就きて明快なる見

解を保持せりや否やを討究する時は、遺憾乍ら前掲書第一版の關する範圍に於ては、甚だ曖昧模稜要旨の捕捉に苦しまざるを得ない。例へば「資本の蓄積に伴ひ利子並に利潤の率は低下するであらう。又商業の擴大に伴ひ分業愈々精密を加へ、爲に總ての製造品を激増し低廉ならしめるであらう。爰に於てが富裕なる消費者の人員増加が穀物の需要を増加する一方、耕作の失費は低減するであらう。農業は發達せる商業組織の反動の下に榮えるであらう。土地は其產物に對して交換せらる可き貨物の豊富なるが爲、其相對的價值を高めるであらう。而して又第三流、四流、五流の資質の地面が尙耕作に依つて利潤を齎らし地代は累進的陞騰を経験するであらう」(pp. 327-328)と云へるが如きは、單に收穫

ものでは無い乎。更に又「農業國に於ては地代の騰貴並に劣等地に對する耕作の伸展が、既述の如く穀物の自然價格を騰貴せしむる結果を持つであらう。然し商業國に於ては此結果は相殺せられるであらう。蓋し一層完全なる分業と金利の低落有るが爲に、定量の穀物を生産するに對して支拂ふを要する勞銀並に利潤の、一層僅少なるを以て、ある」(pp. 328-329)と云へるが如きは、地代と價格の因果關係に就いて、寧ろリカアドオと相反するものにはあらざる乎。要之吾人はトツレンスの大膽なる揚言有るに拘らず尠く其考察を地代學說に限局する時は、其自ら薦むる文獻第一版に於ては、堅實明確なる統一的表现を缺如したりと斷するを憚るものである。

然るに彼れは同書の第三版に於て、漸く該學說に關する其見解を闡明した。然も其實質たる、他の性質の地代の發生の餘地有るを思はしめる

リカアドオの所説を階調を保持せるにあらざして、却つて是に對する根本的乖離を證示する所のものであつた。就中彼れは地代が種々なる所有地、若しくは種々なる投下資本の生産力の差違より發生する事を否定する。彼れは假令單に同一豐饒性を具ふる土地並に同一の収益力を有する投資のみの存する場合と雖、尙且地代は發生するに相違無しと考へる。即ちトツレンスに從へば、地代は利潤低落の結果發生する。穀物生産費の騰貴の爲に工業に於る資本利潤が、例へば五十パーセントより四十パーセントに低下する時は、隨意に處分し得る資本を有する人々は、其資本を土地經濟に放資し、以て九パーセントの地代を地主に支拂ひ自己が四十一パーセントを享得するを、有利となすに至るであらうと云ふのである(Torrens: op. cit. 3rd ed. p. 139)。斯の如き見解がリカアドオ流地代學說の特質たる

令一脈の相通するものありとするも、然もそれはリカアドオがトツレンスに證示を享けたる爲にはあらず、却つて後者が前者に負へるものなるを想像せしむる理由が有る。

十

總ての事情を綜合するに、リカアドオとトツレンスとの交友の始期は前者が地金論評に參與して後幾許も無き頃と覺しく、爾來往復せる書簡の語調に徴するに、後者の「Corn Trade」の初版が一八一五年に出現の以前、兩者の接觸は既に親密頻繁であつたと推せられる。而してトツレンスの同著初版には何等リカアドオに關説する所無きも、其序言に於て「私的交友」に依り啓發せらるゝ所の尠少なざりしを自認せるは相當注目に價する。然しそれ以後に蒙れる啓發は更に明瞭である。次の如きリカアドオの數通の書簡は、這中消息の一部を傳ふるものとして、

多大の興味を覺えしむるものがある。
即一八一六年二月廿三日マルサス宛の書簡に於てリカアドオは云ふ、「學兄は Lord Liverpool に送れるトツレンスの手紙を披見せられしや。彼れは其地代並に利潤に關する總ての私の意見を採用したやうに思はれる。其上兩三日以前會談の際彼れは今では、食糧獲得の困難の爲に騰貴せる勞働の價格が、商品の價格には影響しなかつたと云ふ私の意見を採る旨を明白に誓つた。彼れは該問題に關する彼れの既往の觀察が、誤謬であつたことを告白した。私は總ての議論が其問題に關する私の見解に味方して、明快に且つ立派に叙述せられたのを見れば嬉しいと思ふ。私はトツレンスがそれを企てた事を疑はなかつた。」(Letters of Ricardo to Malthus, Bonar's ed. pp. III-112)。

更に注目すべきは一八一六年五月廿八日即ち

リカアドオの「原論」の出づる略は一年以前に、同じくマルサスに宛てたる書簡の一節である。曰く「トツレンスは向數箇月間懸命に勉強すると云つてゐたから、吾々は來年同一主題に關する一本を、彼れから期待する事が出來やう。彼れはミルと私が辯舌の限りを盡して正路に向けんとしたに拘らず、依然貨幣並に交換に關して異端邪説を支持してゐる。然し吾々は交換の原理に對する、彼れの視野を曇らせしめる曖昧な諸點を、一掃するに成功した。彼れは、私の考へでは、利潤地代其他に關する學兄の所謂私獨特の意見の總てに改宗したから、私は先づ私の支持する經濟學の諸原理は、學兄か彼れか就れかの權威有る裁可を経ないものはないと云つて好い。其爲に私の意見を公表すると云ふ私の始めた仕事は、甚だ重要で無くなつた。蓋し此等の諸原理は、私が之を支持する事の出來る以上には無視する積りはなく、然も彼れを枚擧しなかつたのは畢竟彼れの學說が一として私には新奇に見えず、又私の取扱つてゐた主題の範圍内に這入つては來なかつたからである。彼れの著書には判然私と所見を異にする諸點が有つたが、私は彼れが其誤謬に氣付いて既に一層適正なる見解を問も無く公表する運びに在るのを知つてゐたから、之を指摘しなかつた。彼れと私の間に應酬した文書に於て、私は私が創見したと自負する總ての點に關しては、彼れが公表した意見は私のそれと正反對であり、又彼れが稱して吾々の意見が一致し且つ其獨創の功は彼れに在りと爲す所のものに關しては、それは總てアダム・スミス若しくはマルサスの中に見出され、隨つて吾々兩人の就れもが發見者と呼べるゝを得ない事を彼れに示さうと力め、且つミルの意見に依ると實際示す事が出來た。吾々の爭論は少し

遙に立派に、學兄若しくは彼れに依つて支持せられるであらうから」云々 (Ibid. pp. 116-117)。
リカアドオの推察に反して尠く共地代學說上に於ては、トツレンスが所謂改宗したりと認むるを得ざる所以は既に前段に論述せる所なるも尙且つ兩者の接觸に依り若干の影響有りたりとすれば、必定啓發を與へし者はリカアドオにして啓發を享けたる者のトツレンスなるは、如上の書簡の雄辯に立證する所である。然らばトツレンスの私的抗議に對するリカアドオの應答如何と云ふに、それは彼れが一八一七年八月廿三日 Hutches Trower に與へたる書簡の一節に明瞭である。即ち「私は私の著書の初刷の一本をトツレンスに贈つた。彼れは私が其中で彼れの名を枚擧しなかつたのに失望して其旨を私に認ため私が確立に力めた若干の原理の本源の發見者たる功績を要求して來た。私は全然彼れの功績をの辛辣味無く行はれ、完全に禮讓を回復して終了した。尤も以前より多少の遠慮を伴つたけれども。其後彼れは二回私と會食し、最後の時にはマルサス氏と初對面をした。席上彼れはマルサス氏の反對意見に對して、其全く改宗歸依した私の學說をば力強く擁護した」云々 (Letters of Ricardo to Trower, Bonar & Hollander's ed. pp. 39-40)。
如上の經緯を觀じ來れば、リカアドオが其一八一九年に上梓せる「原論」第二版の二箇所に於てトツレンスに關説する所有りしは、彼れが後者に負へる庇蔭を認識せる爲にあらずして、寧ろ其根柢無き焦慮に對する慰撫的讚辭と解するが至當である。讚辭の一は勞働の自然價格に於ける變動を論ずる項に於て「Coin Trade」中の一齣を引用し、此主題の全概はトツレンス氏に依りて立派に解説せられたり」と附言せるものに

して(Ricardo: Principles 1819, p. 91, note) 其
二は「貿易路の急激なる變化に就いて」の一章
の結末に「穀物輸入制限の不得策を論難せる最
も有力なる出版物中に位するものに、トッレン
ス氏の「Corn Trade」がある。思ふに彼れの
議論たる、未だ反駁を蒙らず且つ反駁する能は
ざるものである。(Ibid. p. 338)と述べてあるが、
爰に觀照の對象と成れる地代學說に就いては何
等云爲する所を見ない。

最後に看過す可らざるは、トッレンスは其一
八二〇年に公刊せる前掲書の第二版に於ては、
管にリカアドオに對する不満を披瀝せざるのみ
ならず、却つて後者の「原論」を指して「經濟學
及び課税に關する甚だ獨創的なる著作」と激賞
し、且其利潤に關する論講に於て何等リカアド
オの著作に言及せざる事に就き自ら種々なる辯
解を試み、終りに此リカアドオに對する「包括的

該學說を公表せる本來の意圖は穀物條例の擁護
に存し、追次三卷の小冊子を以て所信を江湖に
翹へたが、其最初の一巻「Observations on the
effects of the Corn Laws and of a rise or fall in
the Price of Corn on the agricultural and general
wealth of the country」1814に於ては尙未だ自
由貿易と保護貿易との相對峙せる兩極を振子の
如くに搖動して、徹底的讚否の裁斷に踟躕せる
跡あり。即ち一方に於て穀物自由交易の許容は、
必定國民の生活資料を他國に依頼するの結果を
招徠する爲、一旦緩急の際不則の禍患の這裡に
發生す可きを杞憂し、且つ夫れ農業は製造業に
比較し重要な事數段なりとの論據は立ちて、
之を保護す可き正當の理由有るを強調し乍ら、
他方に於ては食糧供給の全部を自國の生産に俟
つは、是れ穀物の所要量を獲得するに必要な
以上の多額の資本を雇傭するに依り、國民の資

認識は物好きで無い讀者をして、假令個々の原
理に就いてはリカアドオ氏に言及せずともそは
決して著者が説明の言葉調子を變じて剽竊を犯
すの意圖にあらざる事を、信せしむるに充分で
あらう」と云つてゐる。換言すれば彼れはリカ
ドオの生前に於ては公開的に抗議を披瀝する事
無く、後者の物故以後三年を経過して始めて失
當の要求を提示し、然も直に兩者の就れをも熟
知せる McCulloch 並に J. S. Mill に依つて反駁
せらるゝ所となつたのである(Hollander: David
Ricardo, pp. 9396)。洵にリカアドオが直接啓示
を自認せるは唯だマルサス一人であつた。

十一

マルサスは管に人口學說史上の冠絶せる巨擘
を以て許容す可きのみならず、其純理經濟學の
發達に資する所亦甚大にして、就中地代學說に
關する研纂は最も卓越せるものである。彼れが
源を或る程度まで浪費するものなり(Malthus)と
の见解を排除するを得なかつた。換言すれば彼
れは英國國民に取りては其所要穀物の若干量を他
國より購入するは、之を自國に於て産出するよ
りも一層容易にして勞少しと思惟せるものであ
る。而して何が故に其然るやは直截明快なる論
證を缺如すと雖、尙次の如き言說に徴すれば、恐
らくは收穫遞減の法則を考慮せる爲と推斷し得
られる。即穀物生産の失費に關し英國と大陸農
業諸國との間に莫大なる懸隔有る所以は、「決し
て單に課税にのみ起因するにあらず。其一部分
余の考察に従へば其尠少なからざる部分は、増殖
し行く人口の需要に對應せんが爲、年々滅々一
層劣悪なる土地を開墾改耕するの必要より生ず
るものである。斯かる土地は勿論其耕耘に一層
多量の勞働施肥、及び凡ゆる種類の失費を要求
するに相違無い。かるが故に穀物の産出價格は

一切の課税を度外視するも、尙且爾餘の歐米諸國に於るよりは恐らく高價に上るであらう」と (pp. 40-41)。然るに其最終の一巻 “Grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn” 1815 に於ては、既に述べたる穀物條例調査委員會の聲明に共鳴し、關稅の撤廢は從來の農事改良を半途に挫折し徒に多額の資本を枯死せしむ可しとの論據に立ちて保護貿易に左袒する旗幟甚だ鮮明なると共に、前著に現前せる收穫遞減作用の觀念は漸く輕視せらるゝに至つた。尤も彼れは同書の一脚註に於て余は穀物の眞實産出價格なる言辭を以て、一國の生産額に對する最後の追加量を獲得する爲に雇傭せらるゝ所の、勞働及び資本の眞實の分量を意味する。而して凡ゆる富裕にして進歩的なる國家に於ては、累次劣等質の土地を使用する必要の爲に、粗生々産物の價格は不斷に増

大する強烈なる傾向がある。然し這般の傾向は一部分耕作並に勞働經濟の大改良に依つて逆抗せられる (p. 21, note) と述べてゐるが、然も全卷の基調は寧ろ英國の穀物産額が多額の困難を要せずして著しく増加し得可きを指示せんとするに在り、現に蘇國に見るが如き農業の偉大な改良勞働經濟の善良なる管理を一般に擴張する時は、穀物の眞實價格を低減せしむる事すら敢て不可能にあらざる所以を示唆せる程である (p. 21)。斯くて地代學說の關與する限りに於ては、マルサスの三文獻中最初の一巻は思索未だ爛熟せざる恨み有り最終の一巻は所論既に偏執に走れる傾き有り、獨り兩著の中間に出でたる “An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the principles by which it is regulated” 1815 は、所説亦た中庸を保持せるの故に最も學界の注目を牽けるものである。私も亦た隨つて

専ら同書を中心に、彼れの論旨の考察を試るであらう。

十二

マルサスは先づ「土地の地代とは全産額の價値より、其當時に於る農業資本の通常の利潤率に依つて計量せる被傭資本の利潤をも包括する所の、凡ゆる種類の耕作の出費を總て支辨したる後に、尙其所有者の掌中に殘存する其部分である」との定義に於て、リカアドオの同意を博せるのみならず (Ricardo: An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock, Works, p. 371) 較差地代の觀念を明示せる點に於て兩者の近似は最も密接である。即ち彼れは土地の生産力を以て機械に擬し、之を製造業に於る機械に對比して云ふ、「穀物並に粗生々産物を産出する機械は、天賦の資性であつて人力の作品ではない。而して吾人は經驗に鑑み

此等の資性には甚だ異なる質と力の存するを知る。製造業に於る最良の機械の如くに、最少の勞費を以て最大の産額を齎らす最上の豊饒地は増殖し行く人口の有効需要に對應する程決して充分では無い。爰に於てか粗生々産物の價格は自然一層低劣なる機械を以て一層失費を要する過程に依り、之を産出する所の費用を賠償するに足る程度にまで上進する。然して等質の穀物に二個の價格は有り得ざるが故に、其産額の割合に之を運轉するに要する資本の僅少なる可き他の總ての機械は、夫々の優良性に比例して地代を齎らすに相違無い。

斯くて凡ゆる廣濶なる國土は、穀物並に粗生々産物の生産に關して、優劣の楷梯有る諸種の機械を具有するものと看做し得る。而して這個の楷梯中には、常に總ての大領土が概して豊富に有する所の凡ゆる種類の劣等地の變質を包含

するのみならず、亦優良地が愈々益々産額の追加を強要せらるゝ時に使用せらるゝとも稱す可き、低劣なる機械をも包含してゐる。粗生々産物の價格が昇騰を繼續するに従つて、此等の低劣なる機械は追次活用せらるゝに至り、又粗生々産物の價格が低落を繼續するに従つて彼等は活用に抛棄せられる」(Malthus: Nature and Progress of Rent, pp. 38-39)。是に關聯して彼れは富裕繁榮なる國土に於て多大の地代の發生を可能ならしむる所の、粗生々産物の高價なる理由を收穫遞減の法則に求めて云ふ、余は一國に於る通貨の紊亂並に他の一時的偶發的諸事情より獨立して、穀物の貨幣價格の比較的高價なる原因が其眞實價格の比較的高價なる事、換言すれば之を生産する爲に雇傭せねばならぬ資本並に労働の一層多量なる事に存する所以を、聲明するに躊躇せず。既に富裕にして又更に其繁榮並

る」(P. 45)。

思ふに收穫遞減の法則の作用と地代の發生騰落との間に存する原因結果の關係を明瞭に別抉したる如上の言説が、リカアドオの思索に甚大なる啓示を賦與せるは否定す可からざる事實である。即ち一八一五年二月六日彼れは親しくマルサスに一書を寄せて、「私は今吾々に將來論證の主題を提示しさうな各齣を抜抄する積りで、地代の陞騰進展に關する學兄の論文を深甚なる注意の下に讀過した。這中の主要なる諸原理の總ては全然私の讃同を表する所で、且つそは獨り地代許りで無く課税其他數多の難問に關して重要なる幾多の獨創的見解を包含せりと思惟するも決して溢美では無い」(Letters of Ricardo to Malthus, Bonar's ed. pp. 58-59) 其獨創的卓見を稱揚せるのみならず、亦た自著に於ても屢々其先蹤を認容し激賞してゐる。

に人口を増進せんとする諸國に於ては、何が故に穀物の眞實價格が高價にして且つ不斷に上進するか理由は、不斷に一層劣悪なる土地に依頼せざる可からざる必要中に見出される。即ち之を運轉するに一層多大の失費を要し、且つ其故に其國の粗生々産物の新たなる追加分量をば常に一層多額の費用を拂つて購入せしむる如き劣悪なる機械に依頼する必要有る爲である。約言すればそは進歩的國家に於ては、穀物は現實の供給を齎らすに必要な價格を以て賣却せられ、然も此供給が愈々益々困難となるに伴ひ、價格が比例的に昇騰すと云ふ重要なる眞理の存する爲である」(Pp. 40-41)。假令耕作の改良は收穫遞減作用を一時的には阻止するとも、所詮永久の防遏とは成り得ない。彼等は時に強大なる勢威を揮ふも、尙且つ劣悪なる土地或は低劣なる機械の採用の必要を相殺するに足る事稀である

爰に於てか一派の論客はマルサスを以て近世地代學說の眞正なる發見者と看做し、リカアドオを以て唯だ前人の糟粕を喫せるに過ぎざるもの、譏誹するに至つた。時に Leser は「Robert Malthus als Entdecker der modernen Grundrententheorie」Jena, 1881 なる小著を公表して云ふ、「斯の如くマルサスは穀價の解剖に依つて地代の説明を完全に論じ盡した。幾多の追隨者は該問題の學理的方面に關しても將た又實例の完全なる分拆に關しても、此等の叙述に寸毫の附加する所無かりしものである。天才の事業は一の全然嶄新なる見解、一の全然改變せられたる觀察を齎らす一そは地代に關してマルサスの享く可き榮譽である。一旦斯かる完全明瞭なる思想にして表現知悉せられんか、須臾にしてそれが其凡ゆる可能的結果に於て研究せらるゝに至るは誤り無き所である。斯くて其才幹の卓越に於

て伯仲の間に在る人物が此殘されたる使命に任ずる時、必定是れに伴ふは唯だ該思想の迅速豊富なる發達有るのみである」(S. 110)。而して、

Leserに從へば、此マルサス流地代學說を簡單に通俗化すると云ふ役目を、唯だそれのみの役目を、演じたのがリカアドオであつて、其功績如何に顯著なりと雖畢竟亞流たるを免れずと云ふのである。

吾人は其人口學說の餘りに赫耀たる光彩を放てる蔭に、往々閑却せられ勝ちなる他のマルサスの貢献の一を極力表彰せんと欲するLeserの意圖に對して、多大の感興を覺ゆるものなりと雖、尙且つ彼れがマルサスに呈せる過大の褒辭隨つて又リカアドオに致せる不當の評言に關しては、到底讃同を表する能はざるものである。

蓋し公正なる觀者は研纂一步を進むるに及んで直に所謂マルサス流地代學說とリカアドオ流地

とて後說に越けるものである。而して如上の消息は先づ地代發生の原因に於て看取せられる。

マルサスに從へば、地代發生の直接原因は粗生々産物の生産費に對する市場價格の超過であるが、此超過を可能ならしむる原因として三條を列擧する。第一の、而して主たる原因は、土地には其土地の上に雇傭せらるゝ人々を支持するに必要な分量以上に、一層多量の生活必需品を産出し得る性質有る事である。第二は、生活必需品には夫れ自身の需要を創造し得る特質、即ち生産せられたる必需品の分量に比例して其需要者の數を上進し得る特質有る事である。而して第三には、最も豊饒なる土地が比較的稀少なる事である」(Malthus: Nature and Progress of Rent, p. 2, p. 8)。若し前掲三因中就れの一條にても缺如したりと假定せんか、地代の發生は不可能であらう。即ち第一に總ての土地が其

代學說との間に介在する杆格は、兩者の近似よりも更に遙に甚だしきものあるを首肯す可きが故である。

十三

地代は抑々天與の恩恵に起因する乎。將た自然の鄙吝に基く乎。そは絶對的に本質を異にする事實と云ふよりも、寧ろ同一現象に對する觀照態度の相違と云はゞ云へる。蓋し地代を以て吾人に特定の優良地を給與せる神の仁慈に歸するか、或は斯かる優良地を一層豊富に與ふるを否める神の吝嗇に歸するかは、必ずしも現實事象其物の相違に非ずして、是に對する觀者の見地の相違と看做し得可きが故である。然も此見地の異同は應てマルサスとリカアドオと、兩家の地代學說の凡ゆる離反の根源であつた。換言すれば前者は佛國經濟學者流の先入的偏見を以て前說を固持せるに對し、後者は之を打壞せん耕作者の支持に必要な以上の生産を齎らし得ざる時は、如何に完全に土地が獨占せらるゝとも、尙地代たる可き餘剩性産物の皆無なるは明白である。第二に人口の増加が食物の増加に追隨せざるものとせば、食物生産量の増加は食物の價格を其生産費にまで低下せしめ、復た地代たる可き餘剩を残さない。

爰に於てかマルサスは極力地代を讚美して曰く、そは決して地主にのみ有利にして消費者に有害なる單なる價值の移轉と看做す可きにあらず、却つて神の人間に與へたる土壤の包有する所の最も高貴なる性質——之を耕耘するに必要なる以上の人々を支持し得可き性質の、明晰なる表徴にはあらざる乎。そは正しく總ての力と享樂との源泉と呼ぶ可き、土地生産物の餘剩部分にはあらざる乎。然り吾人は後段に於て、そが絶對的に必要な源泉たるを看るであらう。

洵に之を餘外にしては、都市無く陸海軍無く美術無く學藝無く發達せる工業無く異國の有用品奢侈品無く、而して常に個人性を向上品威有らしむるのみならず衆民全般に有益なる影響を及ぼす教養有り優雅なる社會も、亦た存在する事無かる可し」(Malthus: op. cit. pp. 16-17)。

然らば第三因たる最上豊饒地の比較的稀少に就きては如何と云ふに、「元始社會或は詳言すれば往昔人智と資本との専ら新鮮豊饒なる土地に使用せられたる時代に於ては、此餘剰生産物に此天賦の寛仁なる賜は、主として異常の高き利潤異常の高き勞銀として其姿を示し、地代の形態に於て現前する事は稀有である。豊饒地の存在潤澤にして、之を欲する者の欲するまゝに占有し得る間は、固より何人も地主に地代を支辨する事無かる可し。乍併此状態の繼續は、自然の法則並に地質の制限が之を許さない。土壤並に

地位の變化は必然總ての國土に實在するに相違ない。總ての土地悉く最上に豊饒なる能はず、又總ての地位が悉く航行の便有る河川並に市場に最も近いと云ふ事實は有り得ない。斯くて最大の自然的豊饒性並に最上の有利なる地位を具備せる土地に使用するより以上の資本の蓄積は、必然利潤を低下すると共に、人口が生活資料を凌駕して増殖する所の傾向は、一定時の後に於て必ず勞銀を低下せざれば歇まぬ。斯くて食物の價格は、利潤を包含せる生産費に超過する。此超過が地代を構成する。かかるが故に一國の富裕が相當莫大なる程度に到達し、又人口が相當稠密と成るに従つて、固よりそは資本利潤並に勞働賃銀の兩者に於る大なる低落を餘外にして生起し得ざる所なるが、特定質の土地に對する一種の定着物として地代を分離するは、引力の原理の作用と等しく變改す可からざるものである。

る。而して其地代たる、單なる名目的價值にもあらず又人民の一階級より他の階級へ不要有害に移轉せられたる價值にもあらず。そは地主、王侯、或は現實耕作者の何人に依りて所有せらる、其自然の法則に依りて爾か有らしめたる所の、土地に關する國民的財産の全價值の最も實際的なる且つ最も本質的なる部分である」と云ふのである(Malthus: op. cit. pp. 17-18)。

思ふに如上のマルサスの見解には、地代の發生を以て神の恩恵と頌へ乍ら、尙且つ「優良地の比較的稀少性」を其一緣由と看做す所に、掩蔽す可からざる無理が有り瀾縫す可からざる破綻がある。故にリカアドオの合理的思索が其一因を採りて他を拋棄せるは、固より自然の數である。以爲らく、土地が其耕作者を支持するに足る以上多額の生産を齎らすの事實は、唯だ地代を可能ならしむる所以にして之を實在せしむる原

因ではない。「吾人は地代が耕作せられつゝある土地の絶對的豊饒性に比例せずして、其相對的豊饒性に比例する事を銘記しなければならぬ——地代は土地の豊饒性の増加又は減少と共に直接に且つ必然的に上進又は低下するものにあらずして、其豊饒性の増加は其土地をして、或る將來の時期に増大せる地代を支拂ふ事を得しむるものである。豊饒性の極めて貧小なる土地は、固より地代を負擔する能はず。豊饒の中庸を保てる土地は、人口の増殖に伴ひ中庸の地代を負擔し又豊饒性の莫大なる土地は莫大なる地代を負擔するに至るであらうが、乍併莫大なる地代の負擔に堪へ得ると云ふ事と、現實に之を支拂ふ事とは夫々別々の事柄である。土地の豊饒性の至大なる國土に於る地代が、土地が中庸の收穫を産出する國土に於る地代よりも、一層低いかも知れぬ。是れ偏にそれが絶對的豊饒性より

も、寧ろ相對的豐饒性に比例するが故である」
 (Ricardo: Principles, Works, pp. 246-247)。

次にマルサスに依る地代發生の第二原因たる食物は夫れ自身の需要を創造すると云ふ觀念も復たりカルドホは否定する。即ち食物の豊富なる事が其需要を増加するにあらずして、反對に需要者の豊富なる事が食物を増加せしめるのである。「吾人は需要せらるゝよりも一層多量の貨物を、永續的に生産するの必要は寸毫もない。若し偶然に依て需要上に多量の貨物が生産せらるゝならば、そは其自然價格以下を低落し隨つて普通の資本利潤を包含する所の生産費を支拂はないであらう。斯くして供給はそが需要に調和するに至るまで、而して市場價格が自然價格の程度に騰貴するに至る迄、停止せらるゝであらう—其結果が穀物の市場價格を其自然價格以下に低落せしめ、且隨て利潤率と通常以下に低

る需要に對應する以上のものを生産するならば彼等は損失を蒙るであらう。獨り穀物の生産者のみ同一事情の下に居らざる理有らんや。苟くも利得有る價格に於て是に對する需要の存せざる限り、彼れは穀物を産出しないであらう。誰しも資本増加を欲するならば、利得有る價格に於て賣却し得可しと思惟す可き正當の理由有るものを生産する。彼れが勞働に支拂ふ所のものは貨幣、而して彼れの求むるものも亦た貨幣である。固より彼れは早晚從前以上の需要を生ずる貨物の穀物なる可きを豫測するが、然し其故に彼れが之を生産するは、恰も彼れが他の貨物を生産す可き場合と同様に、目的に對する手段としてある。穀物の生産せらるゝは、直接の需要有るか若しくは需要の追加が合理的に豫測せらるゝ爲である。乍併吾人が此等有るの故に、穀物は夫れ自身の需要を造るとか、或は其豊富

下する事に依り彼れの利潤の一部分を彼れより奪奪するに至るに拘らず、尙且實際に需要せらるゝよりも以上の穀物を、生産す可き如何なる動機を農夫は持ち得よう—通常の順序としては、總ての貨物に對する需要が其供給に先立つのである」と云ふのである (Ibid. pp. 242-243, 250)。
 彼れは更に一八二〇年九月十五日付 Frower に與へし長文の書簡の一節に於て、這般の討論に言及して云ふ、「如何なる貨物も是に對する需要有るにあらずんば産出せらるゝ事無し。若し需要無きに産出せらるゝならば、その價值は低落し、爲に是れに投下せられたる勞働を報償し且つ普通の資本利潤を提供するに必要な價格を、保たざるに至るであらう。既に此事實にして眞なる以上は、穀物と絹布、麥と砂糖との間に如何なる差違か存す可き。若し此等の貨物を製造或は産出する所の人々が、一定の價格に於

なる事が人口の増加を誘ふとか稱するは失當である。如何となればそは常に自然價格若しくは利得有る價格以下の穀價を假想せしめ、然も斯かる條件の下に之を生産するは何人の利益にもあらざるが故である。勞働に對する需要の増加は、直接人員の増加に依つて充足せらるゝものにあらず。蓋し勞銀の騰貴が同一の人員をして從前よりも一層多量の仕事を甘受せしむるに至るからである。隨つて資本の増加並に是れに伴ふ勞働に對する需要の増加は、必ずしも食物に對する需要を増加せずして、勞働者の嗜好に適應する他物の需要を増加する。第一番に生産せらるゝは之等の貨物であつて、穀物に對する需要の異常に増加するは、漸く子供の數が増殖したる時に於てある。此時に及んで始めて第一番に需要せられたる貨物は抛擲せられ、穀物に對する需要の増加が起るであらう。私は貴兄が前

叙の事實を以て穀物が其需要者を創造せざるは猶衣服が其着用者を創造せず葡萄酒が其愛飲家を創造せざるが如しと云ふ、私の唱導せる意見の正當なる證左と看做されん事を期待する。(中略)。願はくは此はマルサス氏に對する反駁なる事を御了承賜り度い。即ち彼れは穀物には他の總ての物と異り夫れ自身の需要を作る特質ありと主張し、反之私は彼等の間には何等の異なる所無く、過失と誤算に基かざる限り、欲求せられざる物の生産せらるゝ事無しと主張するものである。J. A. (Letters of Ricardo to Trower; pp. 121-123)。

斯くて異竟リカードオの見解に従へば、地代の發生は偏にマルサスが其第三命題に於て論述せる、最上豊饒地の比較的稀少なる一事にのみ起因するものである。既に發生原因に關して如説の見解の相違有り、然らば亦た地代の騰落に

定上進す可しと斷じてゐる (Malthus: Nature and Progress of Rent, p. 20)。反之リカードオは唯で單一原因をのみ主張する。廣汎なる意義に於る收穫遞減作用の實現が是れである。固より地代の騰貴と利潤の低落とは常に形影相伴ふものなれども、然も其「利潤の低落するは、偏に食物生産上同等に好適なる土地の、穫得せられ能はざる爲である。而して利潤低落並に地代騰貴の程度は、全然生産失費の増加に左右せられる。故に若し一國の富と人口の進展に伴ひ、資本の増殖毎に豊饒地の新たなる部分を其國に追加し得るものと假定せば、利潤も低落せざる可く地代も騰貴せざる可し」と云ふのである (Ricardo: Influence of Low Price of Corn etc. Works, p. 375)。

思ふに廣義に於る收穫遞減作用の必至的實現、換言すれば人口の増加に對應す可き食物の

關しても、一が複數原因を列擧するに反し他が單一原因をのみ認容せるは、極めて當然の歸趨である。

十四

マルサスに於ては穀物の價格と耕作の失費と兩者の間に存する擴大する所の主なる原因、換言すれば地代騰貴の主原因には四個條を算する。「第一は資本利潤を低下せしむる程の資本の蓄積である。第二は勞働賃銀を低下せしむる種の人口の増殖である。第三は特定の効果を發生せしむるに必要な勞働者の員數を減少せしむる程の、農事の改良若しくは努力の増加である。第四は名目的に生産の失費を低減する事無しに、此生産の失費と生産物の價格との差等を増大する所の、需要の増加に基く農産物の價格の騰貴である」。而して勿論前掲四原因は悉く同時に協力するを要せず、其一條だに存すれば地代は必

生産の爲、素質或は地位に於て一層低劣なる處女地に倚賴するか、然らずんば收益の相對的漸減の下に既墾地の放資を繼續増加するの必要が地代騰貴の一因たる可しと思惟する觀念は、リカードオ以前既に存し且今に至るまで學界の定説たる所である。唯だ之を以て唯一無二なる原因と看做す所に彼れの特徴を見る。リカードオ曾てマカロツクに書を與へ、マルサスと自己の個性の相違に言及して謂へらく、「吾等の討論するや甚だ峻烈なる論戰に陥れども、相互に最善の感情を失ふ事無し。彼れの凡ゆる見解は、吾等の熱心なる論争の對象と成る。余は彼れに云ふ、彼れは此點に於て余に優越する事萬々なりと。真相を云はば彼れは甚だ細心に過ぎ、余は甚だ淺慮に過ぐ」(Letters of Ricardo to McCulloch, pp. 3233)。言や正鵠を穿てるに近い。蓋し地代學說上に於るマルサスとリカードオとの所

見の相違は、兩者が夫々慣用する所の研究方法の相違に起因する。即ち細心なるマルサスは實證的歸納的觀照の態度を偏重したるの故に、地代の發生騰落に關しても、現實の世相に照應して數個の原因を保留せるは可なるも、若し夫れ學理的價值より検討する時は、論理徒に錯綜して整然一貫せる連鎖を求むるによし無き憾みがある。然るにリカアドオは是れと趣を異にする。

彼れの常套手段たる抽象的演釋的觀照の態度は單獨原因を抽出して是れが徹底的推理を試みた而して吾人は現今經濟學の有する明快なる地代の觀念は、之をマルサスに負ふよりも寧ろリカアドオの賜なるを斷言するを憚らぬ。蓋し一の學說は假令其究竟に於て誤謬たるを闡明せらるゝとも、そは須く其凡ゆる可能的結果に於て追求せられねばならぬ。然らずんば其學說の所屬する科學は、所詮平俗の水滸に遲滞し永久に進

らず、更に廣潤なる純理經濟學の見地より地代の性質の十全なる究明を試みた。然らば乃ち假令先蹤の存在如何に顯著なりと雖、尙且つリカアドオが所謂リカアドオ流地代學說の眞正の樹立者たる事實は、斷じて抹消し能はざるものである。

然らばリカアドオ流地代學說の本質如何、私の本項に於て目的とせる所は、専らリカアドオと其先蹤との交渉に限局せられたるの故に、リカアドオ流地代學說其物に關しては、必要の箇所必要の限度に於て斷片的に考察したに過ぎぬ之を其全相貌に於て觀照すると共に其現代に保有せる地位を検討するは、順次向後の研究に譲らんと欲するものである(此項終)。

歩を期し難いであらう。若しリカアドオにしてマルサスの如く現實の事象に惑溺して抽象的推理を排斥したりと假定せば、兩者の地代論辯は再びアダム・スミスに依つて殘されたる曖昧茫莫たる觀念に歸還し、更に何人が放膽なる思想家が、曾てリカアドオの行へる所を敢て行ふに至るまで依然として混沌裡に停頓したであらう洵にリカアドオはマルサスに對比し、一層一律的一層學究的であつたのである。

斯の如くに觀じ來れば吾人はリカアドオの地代學說出現以前に於て、既に幾多の先蹤の明に存在したる事實を承認しなければならぬ。乍併彼等は僅々部分的先蹤たるに停まり、且つ當面の時事問題に即して狹隘なる範圍に踟躕せるに過ぎぬ。然るにリカアドオは前人の不明を透徹し不備を補足し矛盾を剔抉し曖昧を排除して、錯綜せる論理の起伏を平坦ならしめたるのみな

アダム・スミスの自由主義に就て

濱田 恆一

(一)

恒久不變なる人間性はアダム・スミスが社會哲學の根本原理にして(註1) 常に最大幸福を人類に附與すべき神の確信はその根本思想たり(註2) 之が人間生活の研究に表現せられたるものは即ちその經濟學、倫理學、法學等にして、スミスは之等をその公表前に於て既に道德哲學なる稱呼の下に綜合したるが如し(註3)

アダム・スミスの思想は或は自由主義或は自然主義若くは樂天主義と呼ばる、此等三語は皆正當にして且つ此等三個の觀念は、スミスに於